

今週のメニュー

■トピックス

◇塩化ビニル管・継手協会 創立60周年記念行事開催

塩化ビニル管・継手協会 総務部 石崎 光一

■随想

◇古代ヤマトの遠景（90）－【持統天皇（3）】－（完）

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇塩化ビニル管・継手協会 創立60周年記念行事開催

塩化ビニル管・継手協会 総務部 石崎 光一

塩化ビニル管・継手は、現在では、上・下水道用をはじめ、農業用水、建設設備、ケーブル保護などの広汎な分野で使用され、平成25年度の塩化ビニル管の出荷量は33万3千トン、継手の出荷量は3万4千トンという業界にまで成長・発展することができました。

当協会は、昭和29年に「塩化ビニル管協会」として発足し、昭和37年には「塩ビ継手協会」と合併し、我が国の社会資本整備への貢献を目指した「塩化ビニル管・継手協会」として設立され、今年で創立60周年を迎えました。「60周年を無事迎えることができた」ことに対する御礼の催しとして、お世話になった方への感謝の気持ちを込めて、記念行事を9月19日(金)に、パレスホテル(大手町) 葵の間で開催しました。

行事は、「記念式典(15時～)」「記念講演会(15時40分～)」、そして「祝賀会(17時～)」の3部構成で、約250名の方にご出席いただき盛大に執り行うことができました。このメールマガジンをお借りして開催の様子をお知らせし、あらためて関係各位に御礼申し上げたいと思います。

ご来賓として、関係官庁の経済産業省より黒田製造産業局長様、茂木化学課長様、厚生労働省より宮崎水道課長様、そして国土交通省下水道部より塩路部長様、増田課長様他多数お越しいただきました。また、関係団体・会社・大学・販売店他からもご出席いただきました。まず、記念式典では、根岸会長の挨拶、5名の方への感謝状贈呈、続いて来賓挨拶として黒田製造産業局長様からお言葉をいただきました。根岸会長からは、平成16年から今日までの10年を「成熟と再生の10年」として主な活動を紹介しました。

続いて、講演会では、北野 大先生から、「安全・安心な社会を目指して」のテーマでご講演をしてもらいました。永年の先生の研究活動を基にされた内容を、ユーモアを交えてお話いただくと共に、後半では人生訓についてもお話がありました。



そして、祝賀会は、根岸会長の挨拶、来賓挨拶として塩路部長様からお言葉をいただいたあと、日本プラスチック工業連盟の藤吉会長の乾杯で会が始まり、根岸会長が会場を回ってご来場の方にご挨拶させていただきました。また、記念式典および祝賀会のご来賓の挨拶では、戦後塩ビ管がインフラ等を支えてきたこと、また協会が果たした役割について触れていただきました。



行事を通して、司会は2014年ミス日本「水の天使」の臼田美咲さんが行い、また、祝賀会ではクラシック生演奏を行うことで、行事を盛り上げました。

記念行事を盛大にかつ滞りなく取り行うことができましたのも、ひとえに、日頃からの皆様からのご支援・ご指導があればこそと感謝申し上げます。この大きな節目を機に、当協会に携わるものとして気持ちを新たに、業界の発展に全力を尽くしてまいります。

今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（90）－【持統天皇（3）】－（完）

木下 清隆

<杵築大社の創建>

先に、蘇我氏が「出雲の国譲り」の代償として「杵築大社」を創建したことを述べたが、この問題について以下に少し検討してみることにする。

出雲から出た初代倭王は、蘇我氏時代に大己貴命に名を換えられ、「出雲の国譲り」の当事者に仕立てられた。そして、この国譲りの見返りに、この命の社殿が出雲の杵築きずきの地に建造された。このような経緯から神社を「杵築大社」というが、明治になって「出雲大社」に名が変えられた。この杵築大社の築造が何時始まったのか明らかではないが、蘇我氏時代と考えるのが順当であろう。その証拠と考えられるのが、杵築という場所である。



出雲大社（入口と参道）

現在の出雲地方には広大な出雲平野が横たわっているが、約六〇〇〇年前にピークを迎えた縄文海進によって、この平野のほとんどは海になっており、宍道湖も現在と異なり、その西側で日本海につながった入江となっていた。従って、杵築大社のある島根半島も当然、本土側からは切り離されていた。その後、三瓶山さんべの火山灰、神門川・斐伊川の堆積物、更には海退等で徐々に陸地が広がり、現在のような平野が誕生した。

七世紀前後の頃、この社殿が創建された当時は、昔の入江の名残である大きな神門水海かんとのみずうみが横たわっていたが、既にかなりの平野は形成されていたことから、あちこちにムラが点在していたと考えられている。しかし、沼沢・砂州或いは広大な未開地も沢山残されていたはずで、そこには葦が生い茂り、或いは多くの樹木で埋め尽くされた状態だったと想定される。これに対し、杵築大社が創建された場所そのものは半島の付け根に当たり、縄文時代から陸地であったことから、既に縄文人・弥生人が住み着いていた。現在、多くの遺跡が発掘され、かなりの規模だったことが判明している。



三瓶山

このような状況から杵築大社の周辺は、沼沢地も無く社殿建築には結構相応しい場所だったことになる。しかし出雲全体から見ると、この一帯はやはり相当に辺鄙な場所である。要するに神門臣達の居住する場所からは遥かに遠く、生まれつつある出雲平野の数 km 先に在り、当時としては弥生人の子孫たちが、僅かに居住しているに過ぎない場所だったと想定される。

杵築大社が創建されたのはこのような場所だったわけであるが、当時これ程までに辺鄙な地に、なぜ社を建てたのかは大きな謎として浮かび上がってくる。その場所から見る限り杵築大社は、その建造が全く歓迎されなかった社殿のように見えるのである。



熊野本宮大社

同じ出雲の熊野大社も随分と辺鄙な場所に建っている。しかし、これは祭神が背後にそびえる熊野山に坐す神とされていることから、当然のことといえる。更に熊野本宮大社は和歌山県の奥地にあり、何故こんなところかという疑問は当然湧くが、この疑問についても先述したように本考で解いた。しかし、杵築大社の疑問については、これを解き明かす鍵がどこにもないのである。

このように考えると杵築大社の創建については、恐らく神社創建の理由を知らされた土地の豪族達が、殆ど協力しなかったからではなかろうか、という想定が生まれてくる。欽明朝の日置部設置の場合とは全く異なり、出雲の功績を抹消するような蘇我氏の歴史改竄に多くの者たちが怒り、その代償としての神社建造にそっぽを向いたのではなかろうか。従って、ふさわしい場所の提供が受けられなかったことから、辺鄙な場所に建てざるを得なかった、さらに当初の神社は小さなものにするしかなかった、といったことが想定される。

しかし、その後、老朽化して建て替えられる毎に、徐々に大型化し持統朝になると、歴史に残る巨大本殿が建造されるようになったと考えられる。その理由は、女神天照大神の誕生で、形の上で抹殺されてしまう初代倭王の御魂を祀るためには、杵築の社を立派なものにするしかないとの考えが、生まれてきたからであろう。

杵築大社の本殿が巨大なものであったことは良く知られているが、その巨大さは持統天皇の初代倭王に対する償いの気持ちの表れであったといえよう。償っても償いきれない思いと、そうせざるを得なかった女帝の苦悩の深さが、その高さとなったのである。杵築大社の大きさについては、[\(81\)【蘇我氏による歴史改竄】](#)で述べたのでここでは省略する。

以上、女神天照大神の誕生に伴う伊勢大神と、大己貴命の処遇問題を述べてきたが、問題を残しながらも一応の決着はついた。一方、諸国の出雲神の抹消作業も同時進行で進められたと考えられる。これまでに何度も述べてきた「出雲隠し」である。大所は日前・国懸ひのくま くにかかす神宮、熊野速玉大社、熊野本宮大社といったところであるが、これらの神社の祭神については先に述べたように (30)【[日前・国懸神宮の祭神](#)】、(31)【[熊野本宮大社・熊野速玉大社](#)】、かなり徹底的にその名称変更が行われた。現在のこれら神社の祭神名から出雲の香りを嗅ぎ出すことは難しい。



日前・国懸神社

持統天皇の最後の仕上げは、伊勢神宮で女神天照大神のために建造された神殿への参拝である。(88)で述べたように、伊勢神宮は新たな神殿を現在の正宮の地に建設した。この神殿の新たなスタートに当たり、厳かな祭事が執り行われたと思われるが、この式典のために持統天皇はわざわざ伊勢へ行幸した。式への参列と云うより、むしろ親みづから祭主を奉ずるためだった可能性がある。それは六九二年のことであったが、この伊勢行幸に冠位賭して反対した人物が居た。そのことは日本書紀に記録されている。

- 持統六年（六九二）二月十一日、天皇は諸官に対し「三月三日に伊勢へ行く準備をするように」と詔した。中納言直大式三輪朝臣高市麻呂は、「この時期の伊勢行幸は農繁期に当り、その作業の妨げになるので止めて頂きたい」と上表した。
(直大式は、後の従四位上相当)
- 持統六年三月三日、天皇は留守の官を定めた。このとき三輪朝臣高市麻呂は冠位を賭して、その行幸を止めるよう重ねて諫めた。しかし、天皇は聞き入れず、六日、伊勢へ向かった。

反対した人物は、三輪朝臣高市麻呂であることが分かるが、持統天皇の伊勢行幸に反対した人物は高市麻呂以外、記録には無い。彼は農民が困るからと、理由を述べているがこれは口実で、本当は、「天皇はとんでもないことをしようとしている」との危機意識だったと思われる。三輪氏というのは長らく三輪山即ち大神神社の祭祀を司っていた名族で、出自は出雲である。その彼らが尊崇して已まない初代倭王の存在を、持統天皇が消し去り、そのことを天皇親みづからの行動によって正当化しようとしている。「こんなことが許されるはずが無い」が、高市麻呂の心情であり怒りだったと想定される。

このような挙に出た彼は、当然、官職を剥奪されたと想定したいところであるが、驚いたことに、全くお咎めが無く、その後は順当に出世しているのである。このことは何を意味するのか。恐らく、持統天皇も含めて当時の人々には、彼の行為を正当なものであると理解していた、としか考えられないことになる。「彼はよくやった」が周りの人々の本音だったと言うことである。

持統天皇の一つの決断が倭国の歴史全体を根底から覆し、『古事記』、『日本書紀』という迷路の奥に歴史の真実を封印してしまった。これまでの多くの人々の努力にも拘らず、千三百年経った現在においても、その封印は解かれていない。しかし、これまでに述べてきたような考え方が、史実を反映しているとするなら、この封印は解かれたことになる。

(完)

次回以降は『古代ヤマトの遠景 (番外)』を連載予定にしていますので、ご期待下さい。

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

東京駅のホームで開業当時（1914年(大正14年)）から100年間、屋根を支えてきた柱が、来春役目を終えるという新聞記事を読みました。私が通勤に使っているホームとのことですが、思いあたりません。ある日の帰りに、ホームでいつもの定位置の柱の脇に立った時にふと思い出し、まわりを見回してみると、なんとその緑色の柱が記事になっていたものでした。思わず携帯でパチリ。毎日見ていたのに柱の上部に植物のレリーフが施されているとは気がつきませんでした。



貴重なものや大切なものがすぐそこにあったのに気がつかず、見られないようになって後悔することありますよね。記事に気がついて良かったです。

ちなみに、柱があるのは、5・6番線ホームです。後悔しそうな方は、お早めにどうぞ。
(漠)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp